
夏の終わり

黒澤 哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の終わり

【Nコード】

N2299A

【作者名】

黒澤 哉

【あらすじ】

夏の終わり、皆さんはどうお過ごしですか？浜辺で佇む2人の、夏の思い出。

（前書き）

夏の終わり。

貴方はどうお過ごしですか？

青くさい緑の匂い。
生暖かい風を送る海。

そんな夏も、もう終わりだ。

8月ももう終わりを迎える。そんな浜辺で2つの人影が背景に溶け込んでいた。

俺は幼馴染みの裕美と一緒に、自宅近くの浜辺まで散歩をしに来ていた。波が寄せては返すという動作を、まるでベルトコンベヤーの流れ作業のように繰り返す。

もう6時を過ぎたというのに辺りはまだ明るく、それがかえって俺達の不安を引き寄せる。

歩く速度が遅くなる裕美に俺は話し掛けた。

「夏ももう終わりだな」

「うん……」

返事をしたつきり、裕美は黙ったままだった。

「おい、どうしたんだよ？ ヒロ？」

俺はいつもの呼び方で裕美を呼んだ。

海に行きたいと言ったのは裕美の方だ。しかし、当の本人は気の浮かばない顔をしている。肩まで届くストレートの裕美の髪が風で舞う。

そんな裕美を気にしている俺に、裕美は注意していないと聞きそびれるような声で呟いた。

「——ジロー、死んじやつたね」

「えっ……ああ、一週間前だったっけ」

裕美は未だにジローの死を受け入れられずにいた。それもそうだが、あんなに大切に思ってたのだ。すると裕美は急にしゃがみ、砂を指でなぞる。

「死んだ人って母なる大地、つまり海に還るって言うじゃない？」

もしかしたらジローも此処に還っていったのかな……って思ったら、どうしても行きたくなつてさあ」

気のせいだろうか。遠い海の方角を見つめ淡々と話す裕美を見て、俺は「行きたくなる」でなく「逝きたくなる」と言っているように思えた。

「お前、まさか」

「うん、自分も海に還りなくなっちゃった」

その一言に俺らは少しの間沈黙した。波を打つ音だけが響く。弱音を吐く裕美に俺は小突いた。

「アホ。そんな弱気でどうすんだよ。自分の人生まっとうに生きてから言え」

「でも結局無理なんだよ。この後には辛い現実しか待ってないんだよ——だから優、頼みがあるんだ」

俺の名前を呼び、立ち上がった裕美は、俺の方を振り向き俺の手を握り締めた。添えられた手は凍えるように冷たい。

「一緒に来て、そして……」

嫌な予感がする。ごくりと唾を呑んだ。

「残った宿題と一緒に終わらせよう」

その瞬間、俺は手を掴んできた奴を振り払い、思い切り裕美を蹴り飛ばした。

「何するのよ」

眼を潤ませながら訴える裕美に、俺は思いを全てぶちまけた。

「あのなあ、お前今高校生だろ？ 宿題は計画持ってやれって何度言ったら分かるんだ！ 今年もか？ 今年もお前の宿題の手伝いで夏を終えなきゃいけないのか？ それと言っとくけどなあ、金魚のジローだってお前が餌やり過ぎたり、水取り替え過ぎたりして死んじゃったんじゃないかよ」

少し間を置き、沈黙を破るように裕美はこう答えた。

「てへっ」

「てへっ、じゃねえよ！ お前もう少し、自分が男だっていう自覚持て。俺がそんな事言う資格ないと思うけど、眼を潤ませて『お願い』だけはやめろ」

その一言のせいで、俺は何度鳥肌を立てたことか。

「男としての自覚なら持つてるよ」

裕美はキョトンとした顔で言った。

「じゃあ、何で」

「お前の嫌がる顔が面白いから」

きよほほ、と笑う裕美に俺は拳を握った。小刻みに震える。その様子に気付いた裕美は、不安そうな顔つきで俺を見た。

「そうか、馬鹿は死ななきゃ直らないって訳か。そうだな」

「ゆ、優？」

俺からの殺気に、裕美はあとずさる。

「いいだろう。俺が海に沈めてやるよ。遠慮するな、海に還りたいのだろう？」

じりじりと詰め寄った俺に恐れをなして、裕美はとうとう走り出した。

「待て！ 今度こそお前の馬鹿を直してやる！」

「殺させると分かって待つの馬鹿が何処にいる！」

いつの間にか俺達は、浜辺を全力で走っていた。

傍から見れば青春を感じるだろうが、当の本人達はそんな余裕な

どない。

この時ばかりは宿題など忘れ、思い切り走っていた。

海の色をオレンジ色に染めていた夕日が海に飲まれるかのように沈んでいく。

夕日に染まった海が光を反射してキラキラと輝く。

そう、そんな夏ももう終わりだ。

「the end」

（後書き）

自分は裕美派でした。

宿題はちゃんとやるべきですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2299a/>

夏の終わり

2010年10月15日22時22分発行